

# 会員の ひろば

## 野口雨情と北海道

札幌市医師会

華園 久彬

野口雨情（1882-1945）は茨城県が生んだ詩人であり、かつ童話作家でもあった人である。特に童謡の作詩では有名であり、雨情の名前をご存じない方でも、「からす、なぜ鳴くの・・・」「黄金虫は金持だ・・・」「赤い靴はいてた女の子・・・」「青い眼をしたお人形は・・・」「シャボン玉飛んだ・・・」「十五夜お月さんごきげんさん・・・」などなどの唄い出しで始まるのは皆彼の作品である。大人の方々に親しまれている、「おれは河原の枯れすすき・・・（船頭小唄）」や「磯の鶉の鳥や日暮にゃ帰る・・・（ハブの港）」もまた然りである。

雨情はその生涯で、全国津々浦々に足跡を残しており、教育講演にも非常に熱心であったため各地の有志が業績を讃えて130を超える石碑が建立されているとのことである。雨情が北海道を最初に訪れたのは正確に分っていないが、御子息の野口存彌氏の記述によると、作品の舞台背景から明治35年（21歳）以前であったろうとのことである。その後、何度かの来道のあと、当時としては今のような良好な交通事情でなく、しかも茨城よりもはるかに厳しい気象状況も予想された中、家族を伴って故郷の磯原を出て、明治40年7月20日頃、上野駅を発って札幌の北鳴新聞社に着任すべく津軽海峡を渡って来たのである（当時雨情26歳）。来道するに際しての雨情の決意は

並々ならぬものがあったようで、存彌氏はこの間の事情を「このように父が痛哭の歴史さえ秘めている故郷を離れ、異郷に出ていかなければならない自分の宿命を、北の方の海の向こうをめざすことによって、主体的な意志で選んだものに転換させようとしたのも、そのめざしたところが限りなく自由を感じ、表現できる、明るい地平であるように想像されたからであると思われる」と述べている。

雨情の北海道在住は約2年2カ月余であったが、この間本人にとって、多分忘却しがたいと思われるさまざまな出来事が重った。このそう長くはないと思われる期間に新聞記者として札幌市など4市にあった6社を転々としたことから平坦な日々の生活状況でなかったであろうことが容易に推量できる。

まず、来道して間もなくの明治40年9月には函館市の大火が原因で札幌市へ居を移したばかりの石川啄木との邂逅があった。二人は互いに胸襟を開いて大いに語り合った。この間の資料として雨情の側のものはなく、啄木日記より引用すると、「9月23日夜、小国君（北門新報記者であった小国露堂氏）の宿で雨情君と初めて逢えり、温厚にて丁寧、色青くしてひげ黒く見るからに内気な人なり。共に大いに鮪のサシミをつついて飲む。かつて小国君より話ありたる小樽日報社に転するの件確定。月二十円にて遊軍たること成れり。云々と」。かくて明治40年10月からは小樽日報社の創業に参画。雨情は社会面の主任、啄木はその部下として働くことになった。しかし雨情は主筆（それまで北鳴新聞社勤務時も上司であった人）と意見が合わず、排斥しようとして逆に退社の憂き目にあってしまった。同社にはわずかに1カ月しか在籍できなかったことになる。一方、啄木は同じく主筆の排斥に加わったが、主筆の策謀で分断され、小樽日報に残留。給与も二十五円に昇給が約束され、雨情の社会面主任のポストの後任者とされた。しか

し結局はこれらは雨情を追放するための策略であったことを後に啄木は知る。一時、啄木は雨情に対して強い反感を抱くが、次に述べる雨情への追悼文を記する行動に駆られるほどに戻り、その後の友情に変わりがなかったことが知られる。

次いで雨情は自身の死亡誤報事件に遭遇する。明治41年9月19日発刊の読売新聞に「野口雨情氏逝く」との記事が出た。その内容は「口語体作詩家として東都詩壇の一方に頭角を現し居たりし同氏は昨年初夏の候、北海道札幌に赴き、札幌の諸新聞に従事ありしが、久しく病気の処、此の程札幌に於て客死するに到れり。氏は常陸の人。行年、僅かに二十有八歳なり」と記載されていた。この新聞報道をみて上京中の石川啄木も驚き、「悲しき思出」という追悼文を執筆したというが、まもなく誤報とわかった。誰よりも一番驚いたのは他ならぬ本人ではなかったかと思われる。当時、雨情は同じ報道関係で室蘭市の胆振新報の編集長の職にあったので尚更に、現在ではとうてい考えられない誤報であった。

さらに雨情にとって、多分生涯のうちでも痛烈な記憶として残る事件に巻き込まれる。明治42年2月、札幌拘留所に収監されたのである。当時、室蘭市内で開業していた某医師の個人情報暴露と恐喝容疑が表むきの理由であった。同時に社長ら他6名の同僚も逮捕されたとのことであり、当時の警察は思想的背景での取締りも厳しい状況にあったので罪状については明確にはされていない。結局2-3カ月で釈放されたが、雨情にとってはあまりに大きな、衝撃的な事件であったと思われる。というのは雨情はこれを契機に大正8年までの10年余り、ほとんど作品を発表していないからである。

さらに辛いことが続く。札幌市在住の時、長女みどりを生後8日目で失った。当時は乳幼児死亡率の高い時代であったといえども、親

の心情は決して今に劣るものではない。「シャボン玉」の中で詩われている「シャボン玉消えた、飛ばずに消えた、生まれてすぐに、こわれて消えた」という部分に雨情の切ない気持ちがこめられているとの話が伝わっている。

最終的には明治42年11月に雨情は東京に転出したが以後、北海道に居を構えることはなかった。だが北海道との縁が全く切れたというわけではなかった。度々道内旅行をしているが、大正15年にも札幌、層雲峡、釧路などを旅行し、黒岳に登山までしたとのことである。旅行の目的の一つに教育講演があったとされるがその内容については詳らかではない。この旅行の帰途、余市町に立寄り3首の歌を詠んだ。そのうちの1首が歌碑に刻まれて、親しかった啄木の碑と近接して、余市水産博物館前に建てられている。歌詩は

「海は紫 空青々と 朝日輝く  
茂入山」

である。この詩には若き日、道内に在った時の辛い生活の跡は微塵も感じられない。きっとその時代には過去のさまざまな試練の出来事を凌駕できるだけの余裕があったと理解すべきであろう。雨情は太平洋戦争終結の年、敗戦を知ることなく1月27日没した。64歳であった。

なお、余談になるが1991年になって、余市町に併立されている啄木の歌碑の詩の作者が別人であることが判明した。小生がかつて雨情のこの碑を訪れた際にはこの事実は知らなかった。真夏のとても暑い日であったにもかかわらず、また歌詩とは裏腹に心なしか淋しそう、ぽつねんと建っていたのが想い出されるのである。

#### 文 献

- 1 「父野口雨情－青春と詩への旅－」野口存彌（著）筑波書林（1979）
- 2 「北海道文学史 明治編」木原直彦（著）北海道新聞社（1975）

## 人生、折り返し地点 を迎えて

札幌市医師会  
宮の森記念病院

### 中村 桜子

今年、4度目の年女を迎えることになり、医師となってから20余年が過ぎました。平成18年4月より宮の森記念病院に勤務しておりますが、医学部を卒業して以来、北大病院、釧路赤十字病院、北見赤十字病院、市立札幌病院、札幌鉄道病院、名大病院と数々の病院にお世話になり、最近の数年は名大で研究生生活をいたしておりました。夢中で何かをしているうちにあつという間に20年余りが過ぎてしまい、人生とは短いものだな、とつくづく感じます。同時に現在の病院での勤務が安定した現在、ようやく過去を振り返るゆとりが生じた感じがいたします。いわゆる人生折り返し地点にきたな、と思っています。

10数年ぶりに腎不全、透析専門の部署で2年半余り働かせていただいておりますが、同時に腎疾患以外の患者さんの診療にも携わっており、専門分野以外の最新の医療も勉強させていただいています。若い頃学んだ知識を何とか動員し、久しぶりに購入した内科学書を片手に何とか凌ぐことも多々あります。ご存知のように透析人口は増加の一途をたどっており、高齢透析患者さんの多いことが特徴の一つです。当院も同様にあらゆる病態、合併症を有する高齢透析患者さんが多数おられ、治療に難渋するケースも多いのですが、今後とも私なりに患者さんおよびご家族に当院で治療を受けたことに満足していただけるような、よりよい透析医療を提供できるよう努力していきたいと思っております。当院赴任後、院内スタッフおよびメーカーの協力を得て腹膜透析の導入を行うことができ、少しずつ腹膜透析患者さんを増やせて

いることはうれしいことであり、また名大で行ってきた基礎研究に基づき臨床試験を開始できる機会にも恵まれ、やりがいのある職場を与えられたことに感謝いたしております。

年を取ったせいか、過去はいろいろ反省すべきことが多く、最近よく考えるのは、実にさまざまな方にお世話になって現在の自分が存在するという事です。若い時分は何でも自力で行うことを考え、自分一人でなし得たような勘違いをしたこともありましたが、いずれの場合も仲間の協力なしには達成不可能であったということが、今になってよく理解できるようになりました。もちろん他力本願だけでは周囲の協力は望めませんが、やはり一人でできることには限界があり、人と協力することによって新しい世界が開けていくことがあると強く感じます。これまでの人生お世話になった分、お返しをする時がきたと考えています。

また立場、職種、性別、年齢に関わらず、一人一人の人間が唯一無二の存在であることを忘れずに身近な方々には誠実な対応を取るべきと考えようになりました。私を含め皆がたった1回限りの人生を生きており、縁があって出会った関係であると頭のどこかで忘れないようにしなければならぬ、と思ったりします。口で言うのは簡単で、常に行動に移すのは難しいことではありますが、医療の世界に生きて、人に始まり人に終わるということを実感する場面が多く、人を大切に充実した職場環境を作るとは自分が充実した人生を送ることにつながると考えるようになりました。

過去の反省と感謝の気持ち、そして今後なりたい自分について書かせていただきました。まだ全て実行しているとは言えませんので、口だけで終わらないよう、今年には是非努力したいと思っております。プロゴルファーの中嶋常幸が、第一線で活躍する極意について聞か

れ、「40代までは試行錯誤の繰り返しであり全て勉強、50代になって自分のペースで何事もできるようになっていること、そして60歳で完成し維持すること」という内容の話をしていたのを時々思い出します。私も少しでもその理想像に近づけるよう謙虚に、でも夢をもって仕事をしていきたいと思っています。

最後になりましたが、会員の皆様のみますのご健康とご発展をお祈り申し上げます。本年も何卒よろしく申し上げます。

## 第70回理堂忌について

札幌市医師会  
札幌社会保険総合病院  
**秦 温信**

平成20年11月8日札幌グランドホテルにおいて第70回理堂忌が行われた。この理堂忌は、関場不二彦（理堂）先生が昭和14年8月25日に亡くなってから70回目の命日を迎えることになったことから、その遺徳を偲び、供養と懇談の場として設けられたもので、北海道医師会、札幌市医師会および札幌社会保険総合病院の共催で行われたものである。

北海道医師会 長瀬会長、札幌市医師会 上笠会長、関場不二彦先生の直系の孫である関場 佑氏のご挨拶の後、前札幌市医師会会長であり北海道医史学研究会代表幹事である島田保久先生の献杯で会が始まった。

ここで、記念品として用意された菜（図1）と百結衣稿本上編の抜粋（図2）が紹介され、また、関場不二彦の稿本35冊の展示（表）が紹介された。菜は関場不二彦の書斎の扉上に掲げられていたとされる「獺祭魚書屋」（だっさいぎょしょおく）の木額（島田保久先生所蔵）の写真から作製したものであり、裏には蔵書印を印したものである。また、百結衣稿本上編（関



図1 第70回理堂忌記念菜

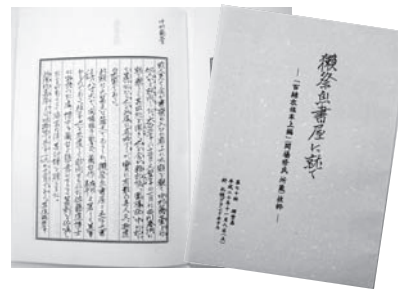


図2 百結衣稿本上編抜粋

場 修氏所蔵)の抜粋はこの木額の作者である中村蘭臺についての記述（明治43年12月の作製で、1字の大きさが8寸四方であることなど）のコピーである。展示された稿本は、明治21年から昭和13年にわたって関場不二彦が随筆として書いたもので、自筆のものである。この後、昭和57年3月6日HTBで放映されたテレビ番組である『さっぽろわが街人物シリーズ・関場不二彦』と題するビデオが放映された。これは、小竹英夫先生とアナウンサーとの対談の形式でなされており、関場不二彦の人となりを紹介

したものである。その後、懇談に移り、北海道医史学研究会の島田保久代表幹事と菊田道彦幹事および孫である関場 健氏のスピーチがあり、それぞれ関場不二彦についての想いが語られた。最後に、旭川医科大学名誉教授 鮫島夏樹先生のご挨拶で会が閉じられた。

今年は偶然であるが別の意味でも記念すべき特別な年となっている。つまり、関場不二彦が初代会長を務めた札幌市医師会の創立100周年にもあたる年ともなっているが、それだけでなく、北方警備のために会津藩から利尻島に派遣された関場不二彦の曾祖父にあたる関場春温らが島で亡くなってから200年目にあたる年でもあり、歴史シンポジウム in 会津『会津藩・北の守備へ』が7月4日若松市で行われた記念すべき年でもある。

今年は関場不二彦が札幌社会保険総合病院の前身である北海病院、北辰病院として引き継がれた関場医院を創立してから115年目にあたる。この理堂忌は、関場不二彦が目指した人間愛に基づく全人的医療をさらに推し進めるべく決意を新たにしたい会でもあった。

表 稿本リスト

書籍名	年代	冊数
青宵独語	明治21-23(附載あり)	1冊
あいぬ雑記(上)(下)	明治27-28(追序あり)	2冊
外科雑纂	明治28/12月-30/1月	1冊
人体畸形綱要	明治42	1冊
雞肋	明治45/3月	1冊
圍爐談	明治45-大正2	1冊
研鑽余暇	大正3/初校	1冊
炉畔閑話	大正3-6(附載あり)	1冊
卵巣腫瘍臨床漫録(一)(二)	大正5	2冊
鹿林園日鈔	大正5-9	1冊
臥牛残喘	大正7-8	1冊
日記断片	大正8-9	1冊
子宮筋腫手術	大正12/7月	1冊
慎独庵随筆(一)-(十)	昭和2-6	10冊
鈍風漫筆(一)-(三)	昭和4-14	3冊
訂頑牖雜俎(一)-(三)	昭和5-6	3冊
老迺道艸卷(首)-(三)	昭和6-18	3冊
老嫻	昭和12	1冊
合計		35冊



# 上落合

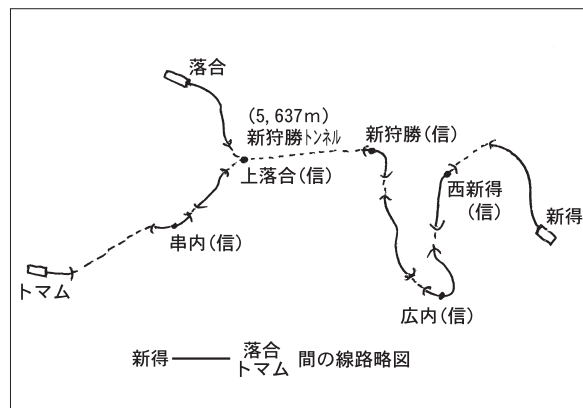
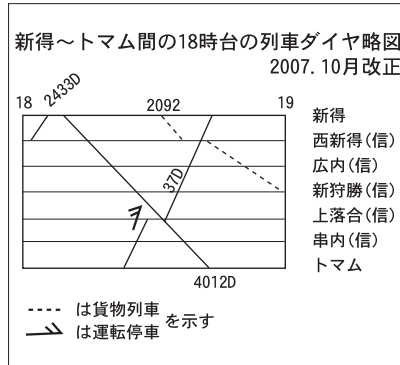
石狩医師会  
御園生 潤

昨年9月24日・25日の両日にかけて、1泊2日の旅程で帯広を訪れた。両日とも秋晴れに恵まれ、片道3時間弱の狩勝越えの列車の旅を満喫できた。

往路はスーパーとかち7号(37D:札幌発16:37、帯広着19:17)を利用した。秋の夕暮れの列車の旅も風情のあるものであるが、新琴似駅から札幌駅まで特急列車へ乗り継ぐために乗車した普通列車の前面車窓からは、はるか遠くの恵庭岳の山並みがくっきりと浮かびあがっていた。

10分の接続で発車した37Dは、ほぼ半数の席が埋まり、西日を浴びて千歳線を快走してゆく。秋の夕暮れの美しさ・素晴らしさを表現した短歌・俳句は古来より数多いが、一年で一番多様な雲形の出現するという秋の空に、日々刻々と変化する夕陽の沈む様子の撮影に没頭するカメラマンたちも少なくない。石勝線に入ってから、後部の貫通扉の小窓から逆光線(西日)を浴びてDVDカメラの撮影を続けていたが、列車の通過により、ざわめくようにさざ波をうつすスキの穂が印象的であった。追分を過ぎると東追分、川端、滝の上、十三里と一駅ずつ確実にDVDカメラに記録された映像の深みが増す。新夕張に到着したころには、すっかり陽も落ち、上りのスーパーとかち8号(38D)との交換。ちょうど日暮れの間帯と重なったホームに、照明灯が両列車を幻想的に照らし出す。こちらはキハ261系(スーパー宗谷と同型)、対向列車はキハ283系の顔合せである。とかち系に運用される気動車も現在3種と多彩である。占冠、トマムと暗闇の中を順調に走りトマム着は定刻の18:17。

今回の旅行の目的の一つが、トマム～新得間に存在する、新狩勝トンネル内の上落合信号場での列車交換を体験することであった。石勝線、根室本線は単線であるが、図のダイヤグラムのように、新得



～トマム間には合計5つの信号場(客扱いのない列車交換施設)が存在するが、全長5,637mの新狩勝トンネルの西側出入口から、ほど近い距離に位置するのが上落合信号場である。この信号場は列車交換の目的の他、滝川方向の根室本線と千歳方向の石勝線の分岐個所としても機能している。石勝線が開通する昭和56年10月以前のダイヤグラムを見ると一日あたり10回以上の列車交換がこの「トンネル内の」信号場で行なわれていた。その後、徐々に減少し、現在では、私の乗車した37Dが4012D(スーパーおおぞら12号)の通過を待つワンシーンに限られるようになってしまった。一般の方にとっては、どうしてもよいことかもしれないが、鉄道ファンにとっては、単線トンネル内に設けられた信号場での列車交換は何とも言えぬ興奮を感じてしまうものである。



トマム発18:18とここまでは定

刻運転である。串内信号場を通過し、第一串内トンネルを抜けると緩い右カーブとなり上落合信号場の場内信号機の現示を予告する中継信号機が2つ設けられているが、斜め3灯の速度制限表示。どうやら対向列車にも遅れはなく「上落合交換」が実現しそうである。対向列車が遅れると、こちらが駒を進めて、トンネルを出た「新狩勝信号場」などでの交換個所変更が行なわれ、今回の目的は果たせなくなってしまう。

新狩勝トンネルトマム口の手前の上落合信号場への下り場内信号機は下り本線(2番線)の信号が黄

色を現示し、本信号場での待避を示している。徐行しつつトンネル内へ進入し、ポイントを渡り待避する2番線へと進入し列車は停止する。乗務車掌の「4分間の列車交換待ち」のアナウンスが入る。私は列車先頭部の貫通

扉の小窓からトンネル内での貴重な列車交換シーンをDVDカメラで撮影をしていたが、ほどなく一条の光が現れ、やがて高速でキハ283系9両編成のスーパーおおぞら12号が轟音とともに通過していった。手元の時計では18:31であった。ほどなくCTCセンターからの遠隔操作で、2番線の出発信号機が青色に変わり、出発反応標識が点灯し、車掌の信号確認のブザーの音が運転室内に鳴りひびき、ホイッスルを鳴らし37Dは出発した。トンネルを抜け、新得の町の灯を左に右に眺めつつ馬蹄型のカーブを一気に下り新得へ。十勝清水、芽室とこまめに停車して、定刻に高架化した帯広駅へと滑り込んだ。

この夜、旧友と会い、日程的にはシビアであったが翌朝一番のとかち2号(183系1500番台)で札幌へと引き返す。昭和63年富士重工業製のプレートが歴史を物語る。「スーパー」なし(振り特急ではない)この列車は速度ではやや

劣るが、車内放送は従来のように車掌が全て肉声で行い、最近多くの車内放送が自動音声化している中で貴重な存在である。この型の列車で、札幌～伊達紋別間を通勤のために10年間往復したことを思い起こしつつ、当時のさまざまな思い出や、加齢とともに精神的余裕が出てきて、ようやく今回のようなことにエネルギーを向けることができるようになったことをしみじみ感じつつ、「得割きつぷ」の旅を終えた。

◇

今から25年前の懐かしい思い出話である。大学卒業を約1年後にひかえた昭和59年2月10日～12日に、現在は小児科医として東京で活躍している級友と流氷見物を目的に「道東回遊きつぷ」で列車旅行したことが忘れられない。往路は超満員の14系客車の夜行列車「大雪」で網走に入り、圧巻の北浜の流氷と納沙布岬の展望を思い出におさめ、釧路に宿泊後、私の強い希望を通してもらい帰路に利用したのが、鉄道ファンには有名であった各駅停車の長距離ドン行の客車列車422レであった。車両は、今ではほとんど見られない旧型客車であり、7:56に釧路を出て、富良野経由で滝川には17:21終着するダイヤとなっていた。この列車は、新得を出てから各信号場にこまめに運転停車し、今回の上落合信号場にも停車した。列車交換はなかったが、手動扉の客車列車であったため、約30秒の停車の間、同信号場内の外気に直接肌で触れることが可能であった。長大トンネルの中の信号場には牽引していたDD51型ディーゼル機関車のエンジン音が反響し、多数の蛍光灯の列と排煙の香りが鼻をついていた（蒸気機関車はすでに運用中止となっていた）ことが忘れられない。時代は変わったが、今回先頭車両の前面部（立ち入りは許可されている）でDVD撮影をしていた私の目に飛びこみ、また、貫通扉のわずかな隙間から私の嗅覚を刺激してきた排煙の香りは、

往時を彷彿させるものであった。



帯広郵便局の風景日付印  
モチーフは依田勉三、  
クロユリ(帯広の花)、十勝連峰

## 三度目の オーストラリアの旅 —見て、聞いて、歩いて—

札幌市医師会

門脇 純一

旅には何か動機があるかと、つい自問することが多いが、今回は単純に季節が正反対であること、時差があまりないことで体に負担がかからないことを重視した、と言えそうだ。それに家族サービスを加えれば格好がよい。

一度目は、ヴィクトリア州のバララット市にあるクイーンエリザベス国際医療福祉教育センターでの短期コースに参加したことである。バララット市はメルボルン市から車で約1.5時間かかり、人口89,500人の都市である。

そこからの帰路に、ゴールドコーストに立ち寄った（道医報991号）。

二度目の旅は、南端に近いインド洋に面したパースで、野生の花の咲き乱れる目的地の春を選んだ（道医報1058号）。

オーストラリアは1億年前に南半球に存在した超大陸ゴンドワナランド。そこから5千年前に分離してオーストラリアが生まれたという。固有の動植物が多いのは、地殻変動による。

またアボリジニの祖先がオーストラリアに約5万年前にたどり着いたと書かれている。現在、アボリジニは2%に満たないそうだ。

オーストラリアの国土面積は日本の約22倍なので、人口1,971万人は極めて少ない。羊毛の産出は世界一である。このことから分かるように、人口よりも羊の数のほうが遥かに多い。オーストラリアは6つの州と1つの準州からなっている。

オージーは、日本ではビーフで有名であるが、オーストラリア人、オーストラリアのもの、おやじなどを指している。バスの中で、ばあさんが作ったのもオージーといって笑わせている御仁がいた。オーストラリア人の気質を代表する言葉に、仲間意識を「マイトシップ」ということがあり、俗語として、It's my shout というと、俺がおごる番となるそうである。この言葉、幸か不幸か、使わずに過ごしてきた。

オーストラリアの国旗は公募によって1953年に制定された。カントン部分のユニオンジャックは英連邦の1員を表しており、七条の光を放つ大星は6つの州とタスマニア島を、5つの小星は南十字星を表している。

世界遺産は世界で851物件あるそうだが、オーストラリアは全部で17、うち11が自然遺産であり、日本のは自然遺産が3で文化遺産が11と大きな違いがある。こんなことでも明白なように、自然に対する思い入れは大変なものがある。

シドニーはニュー・サウス・ウェルズ州の州都であり、人口がオーストラリアで最も多く、国内の文化、経済の中心である。シドニーの被写体で最初に選ばれるのは、オペラハウスとハーバーブリッジで、撮る場所はミセス・マックオリーズ岬からが推薦されている。オペラハウスの建築には、デンマーク人のヨーン・ウッソン氏を選ばれたが、完成の1973年までの間には、紆余曲折があったと聞いた。彼の描いた建築の帆や貝殻の群を思わせるものは複雑と評価され、一次選考では落選したという。この建物には、世界最大級のパイプオルガンが設置されてい

る。

ダーリング・ハーバーにある水族館には、底から見上げるように遊泳する魚が観察され、つい旭川の旭山動物園を連想した。

シドニータワー;250mの高さでの夜の展望は残念ながら雨と霧ですっかり裏切られてしまった。よいシャッターチャンス逃した。

次の日はブルーマウンテンの探訪。この固有名詞、有名なジャマイカのコーヒーと同名だが、旅行ボケの頭には、2、3秒遅れの判別。この山のブルー色は、この地域に多いユーカリの葉から発する揮発性の粒子に光があたり反射することで、そのようにブルーにみえるそう。

オーストラリアの天気予報はあまりあてにならないと案内員さんから聞いていたが、天気予報は外れて喜ぶこともある。この日、頂上の展望台では、快晴となりスリーシスターズの奇岩もくっきりみることができた。この3つの岩には伝説がある。3人の姉妹を持った父が、出没する魔法使いの手からこの3人を逃すための策として、岩に化したというのである。

この山からは、かつて石炭が採れ、山道からすぐそばにぽっかり坑口がみえ、石炭を積んだトロッコもおかれている。そこから数百メートルくらいの場所に、急降下するトロッコが設置されていて乗車できる。ところが、このトロッコが下っていく勾配は52度というから、気持ちの整理が必要となる。一応、形式的に乗車を望まない人は？と問われると、相当のお年の方も乗車を希望した。みんなで乗れば怖くないということもあるが、みんなが乗るなら、断れないなどの集団心理も働いているかもしれない。大倉山のジャンプ台のアプローチ、ランディングを思い出してもこの勾配は怖い。

いざ乗ってみると、驚いたことに、安全ベルトはないし、下降時に下肢を突っ張ってコントロールという古典的な手段が最大の安全を約束するものと後で分かった。

オーストラリアでは、バスの中での安全ベルト、起立、車中歩行を厳しく禁止していることを考えあわすと大きな違いだ。しかし、下降時の速度は、極めて緩やかなものであったことは付記しておきたい。

ついでとなるが、オーストラリアの交通信号は変わるのが早く注意したいし、方向転換にロータリーが多いことも、老婆心ながら付け加えたい。

夕食はディナークルーズで食事をしながら船から街を見ることになった。主食は得意のオージービーフであったが、柔らかな肉に慣れている日本人にとっては硬く、皿の上で切るのに特別の技術が必要とされ、不評のようであった。それとは逆に、船からの光景は角度が変わるごとに、美しく満足した様子。

米の栽培は25種ばかりなされてきたという。日本米も1960年、タカシタ・ジョー氏によって行われたが、あまり注目されず息子さんの代になってやっと評価された。このことは、コシヒカリを、スライスとしスシロールが売れ出した時代の食物嗜好の時代変化の影響もあるようだ。

ブリスベン、クイーンズランド州の州都で、ゴールドコーストへの玄関口ともいえる。人口は184万人、オーストラリアの第三の都市とされている。マウント・クーサーの頂上に展望台があり、ここが撮影のポイント。蛇行したブリスベン川を眺めることができる。

路傍には夏の花、大きな紅いポインシアナを眺めながら移動した。観光用牧場；パラダイスカントリーでは羊の毛刈りショーをみた。海外からのお客さんの多い順に、英語以外の説明があった。その順序は驚いたことに、中国語、韓国語、日本語であった。

また、ここではコアラを抱っこしての撮影もしてもらった。コアラは夜行性の動物なので、日中の撮影は彼らにとっては過酷な仕事に違いない。20~30人ごとにコアラは交替してモデルになるよう

だ。彼らのストレスは大変なものだと取扱人が言っていた。

この思い出の写真撮影後、いよいよゴールドコースト入り。水陸両用車のアドベンチャーダックにて、陸地から水上に、川から街を見て回った。高いビル、立派で美しい家屋はお金持ちのセカンドハウスもあり羨ましい。ゴールドコーストはいまバブルと聞いた。

ゴールドコーストに入った翌日、世界遺産のラミントン国立公園へ。車で2時間前後の近くに3つもの国立公園がある。途中、山道のそばでワラビー、カーペットスネークを見た。園内では吊り橋；ツリー・トップ・ウォークを冒険した。散策中には、ブーメランの盤根の木、絞め殺しのイチジクの木などを見学した。カラフルなクレムゾンロゼラという野鳥も見た。

ゴールドコーストの砂場海岸は、その名でも示されているように長く、サーファーにとってはパラダイスでもある。そして、その海岸からは高いビル、商店、遊技場、施設、レストランなどが近距離に存在し便利である。

ところで、ここには現在、世界一と称する高層マンションがあり有名である。高さは325.5mで、ちなみに東京タワーが330mとする高さ分る。このビルの最上階の80階、一人のために購入したのはどこの国の人かご存知ですか。いま流行のクイズになりましたが、答えは日本人女性です。購入額は5億円とも聞いた。しかしこの女性、何年もたたぬうちにこのマンションを手放したようだ。損失は1.5億円とも？。彼女の階より階下の買い主は、ご推察どおり産油国からのアラブ人だという。

冒頭で述べた私どもの旅行の目的は、ほぼ満足したと思っている。ゴールドコーストのインターナショナルホテルは以前にも宿泊したこともあり、ほとんどが元のままで、懐かしさでいっぱいであった。これが、リピーターの感ずるひと味なのかもしれない。



# 医育制度から考えて

札幌市医師会

竹村 敏雄

## 私が経験した医育機関

私は昭和23年9月に北海道大学医学部を卒業して、1年間のインターンを終了し、昭和24年10月に第7回医師国家試験を受験した。11月になって約束していた道立女子医専の産婦人科医局に行き、診療終了後に医局で私の歓迎会をしてくれた。

医局の机の上に見たこともない清酒が5本も並んでいたのに驚いた。ツマミはスルメだけだったが、皆凄い酒豪ばかりで、忽ち3本が空になった。もっと驚いたことは、翌朝机の上の清酒が2本から5本になっていたことだった。これらの清酒はお産等の患者さんからもらった物だった。基礎学科ではお酒がなかったので、時に病理学に電話すれば、新保教授、小野江教授などの偉い先生と酒を飲め、医化学の大野公吉教授、細菌学の植竹教授とも飲みながら話をしたこともあった。またと得られない貴重な体験だった。

大野精七学長で札幌医科大学が昭和25年4月1日に開学した。女子医専からの昇格で図書も少なく、産婦人科には実験室もなかった。開学して2年目になると、北大医学部と北大医専の卒業生が入局し、外来患者数も2倍以上になり、復員した外科の先輩も入局してきた。

診療終了後は、相変わらず、医局で清酒を飲んでいて、酒の肴はなく、コップもなく、湯呑み茶碗で飲んでいて。

話題は専ら手術、分娩、診療の失敗談や経験談ばかりであった。参考書も医学雑誌もなく、出張は単身赴任だったし、相談する先輩もいなかったので、飲みながらの耳学問が実際に一番役立ったと思う。毎日飲んでいても雑談はほと

んど出なかった。

患者が増えてくると、今まで見たこともない病気や分娩にぶつかって困ったこともあった。数多い診療をマスターするのが大変であった。検査機器はレントゲンだけしかなかったので、手の触診だけが頼りということが多かった。産科の内診では指先に目を付けるような修練が必要であった。

幸いだったことは、医事紛争裁判が全くなかったので、失敗談も話せたし、どうしたら一番良かったのか、ザックバランに討論できた。空酒の耳学問が今でも懐かしく思い出される。

人工妊娠中絶手術は馴れた医師が後について監督し、手術での失敗は早く報告してもらって早く後始末をするようにしていた。例えば、人工妊娠中絶手術で穿孔したと思ったら、すぐ手術を中止して私に連絡してもらい、あとは私が後始末をしていた。

昭和29年1月に明石勝英教授が着任された。大野精七教授時代の手術はドイツ式というか、教授がメスを持って、助手は助教授、講師、医局長くらいで、他の医局員は出張先の病院で、外科の医師に助手をしてもらって、メスを持つというのが通例であった。

私が明石教授にお願いしたことは、医局員全員にメスを持たせて欲しい（これは医局全員の希望でもあった）ということであった。ちょうど中央手術場ができたので、一度に4台の手術台を使えるようになった。

明石教授は私の願いを入れてくれたが、手術の前日に、手術対象患者一人ずつの術者、第一助手、第二助手と麻酔師を、教授と医局長であった私の二人で決めなければならなかった。このため、教授室に行く前に手術患者全員を診察し、腫瘍が動きやすいか、癒着がなさそうか、脂肪が厚すぎないか等を調べて、手術の難易度を推定した。翌日、開腹手術で私の推定が正しかったかどうかすぐ分かったので、またと得難い勉強になった。

明石教授は、手術患者一人ずつについて、レポート提出を義務付けた。そのレポート作成のために、術者、助手、麻酔師など関係者全員が集まって、良かったこと、悪かったこと、各人がそれぞれ意見を出し合ってレポート作成に取り組んだので、大変良い勉強になったと思う。

私が経験した大学医局は、このように本当に素晴らしい医育機関であったと思う。

近年、一部の大学医局の不祥事から大学医局が廃止されてしまったが、大学医局は大切な医育機関であるので、大学医局を復活し、医育機関にふさわしい正しい医局運営をしてほしいものである。

このことは、大学医局の創設期に、医育に一生懸命になった私の願いでもある。

## インターン制度は国家試験とセットで実施されていた

インターン制度はGHQの命令で、その当時アメリカで実施されていたインターン制度にならって昭和21年から実施された。

大学医学部を卒業した直後から1年間のインターンを受け、インターン終了証明書を添えて、医師国家試験を受験できるという仕組みで、この両者は初めからセットで実施されていた。

国内法的には、昭和21年8月30日に公布された国民医療法施行令の一部改正には、医師のインターン制度および国家試験制度採用と書かれており、この両者がセットであるのが分かる。

また、昭和42年3月12日に医師国家試験の受験拒否をした際の要求事項は、医師国家試験とインターン制度の完全廃止であったことから、この両者はセットであったことが分かる。

昭和21年から始まったインターン制度は、臨床全科目の実地修練であって、大学医学部卒業生を医師にするための教育、すなわち医育制度の一環であったが、これが厚生省の所管になったのはなぜであろうか？

大学医学部卒業者に対する医師免許証交付は、昔から大正年間でも厚生省の所管であった。

敗戦後間もない連合軍占領下の昭和21年から始まった医師のインターン制度と医師国家試験制度は、セットで行われたので、この両者は戦前から医師免許証交付を行ってきた厚生省の所管になったと思われる。

昭和43年5月15日に医師法の一部が改正されて、インターン制度が廃止された。これによって医師国家試験は、セットから開放されて単独の制度となり、大学卒業後直ちに医師国家試験を受験できるようになった。

### 新医師臨床研修制度

厚生労働省は平成14年9月27日に「新医師臨床研修制度のあり方について」という案を公表している。

これはインターン制度が廃止された昭和43年5月15日から34年後のことであり、医師国家試験とは無関係の制度である。

新医師臨床研修制度は、医師免許証を持った医師の臨床研修制度、すなわち医育制度の一部であるから、文部科学省の所管であるのが正当であると思う。

厚生労働省の業務は、労働関係の業務を除くと、医療、医療保険、介護、介護保険、健康、医薬品、食品、社会福祉、援護、児童家庭、年金などであって、医師の教育は含まれていない。

新医師臨床研修制度の厚生労働省内の所属は、医政局の中の医事課、医事課の中の医師臨床研修推進室である。

この医師臨床研修推進室が、新医師臨床研修制度を実行したために、極めて激しい医師不足が起り、全国的に地域医療の崩壊現象が進みつつある。

私は、新医師臨床研修制度を、直ちに廃止すべきだと思う。

総合診療医、家庭医の養成が必要であるならば、医育制度を担当している文部科学省に検討してもらおうのも一案かと思う。

## 健やかに老いる

上川郡中央医師会  
老人保健施設回生苑

### 水野 清司

日本は世界の長寿国の仲間入りをしたが、老後の生活の場が通常の住居ばかりでなく、介護を必要とする老人が増え、しかも慢性的な病気や何らかの病気を抱えており、老後の生活の場は医療施設を含めて介護福祉施設も生活拠点として考えられるようになってきた。

病気にならず周囲に気を配り、自分の持つ可能性を十分に活用できている老人は健康な老人といえる。一度しかない人生、一つだけのからだ。早死にしない限り老後は誰にでもある。

人間誰しも歳をとり、死を迎える。一度しかない人生を、できるだけ健康で自分らしい生き方を望む。しかし、歳をとると身体的にも精神的にも老化現象がみられ、そして社会的な活動範囲も狭くなり、自立した生活を営む上で困難が伴ってくる。

自分がその領域に踏みこんでみると、人生総決算の時を迎えた老後のあり方、健康に老いることの大切さを痛感させられる。

まだお役に立てるだけの気力と体力があるのか、老医師として仕事をさせていただいており、現役で老いる必要性に感謝している。しかし、必ず衰える日がやってくる。いい時期には限りがあるもので、はた目には哀れに映っているかもしれない。

人生で一番いい時は過ぎたが、残りの時を悔いのないよう外見上は致し方ないが老いを自覚して過していきたいと思う。

鍛えれば強くなるのが若さ、鍛えても良い結果が出ないのが古いなのである。老齢に伴って生ずる心身の変化を自覚して、常に健康を保持し、またはその知識と経験

を活用して与えられた機会を大切にしていきたい。

長く生きると、人生のその時その時でいろんな思いがよぎり、その時のありがたく嬉しかった思いに感謝したりすることも老いの一瞬なのだろうか。

高齢化社会を迎えている今、随分と高齢社会に対する意識は高まっており、年金や医療、生活そのものに大きく影響する制度が次々と検討されているが、対症療法的な提案が多く、ややこしいことも沢山あり選択や態度が重要になってくる。

老人は「要らない存在」ではなく「必要な存在」とならなくてはいけない。今現在、「要らない存在」として扱っていると、将来老いた時の自分に降りかかることになる。自分の老後を考える時、同世代の人達と積極的に交流し介護福祉に関わっていることを糧として、自分を作り上げていきたいと思う。

そのように考えた時、現実をよく知って、自分の人生に夢や希望を描くことである。もし、自分の人生の残り時間がわかったとしたら、最後に何をしたいと願うだろうか、その時、自分の人生を「最高の人生だった」と振り返ることができるだろうか？

毎日、高齢者との交流を通して実態を理解し人の生命力のたくましさを感じると同時に人の命のはかなさも感じている。

そのように考えた時、今の自分の老いは、職場の若い世代とも積極的に交流して信頼されるような、そんなパワーをもって、自分の経験や知識を伝えつつも、若い世代から多くのことを学び、それを自分の糧として、自分を作り上げ、日々感謝して健やかに老いていきたいと思っているこの頃である。